

報告ゼミを、同じ八王子のセミナーハウスでもったのは、10年前のことである。

宗教都市天理市の都市研究、筑豊宮田町の石炭産業の崩壊にともなう地域変貌、西脇の織物業、静岡榛原町の茶、徳島の葉タバコ、勝沼のワイン生産など、テーマは、多方面にわたるのが都留大地理ゼミの特徴の一つである。毎週のゼミでは、学生間で活発な討論をかさねるよう心がけているとはいえ、一教師の指導できる力量にはかぎりがある。多くのスタッフに学んだ学生との交流と討議は、都留大の学生にとって欠くことができないものである。にもかかわらず、その機会がなかなかつかめない。こんな事情をかかえていた私は、お茶大生の合同ゼミへの賛同をえたのである。

地理は、文献だけでは卒論が書けない。フィールドをあるきまわって、泥くさくなって、はじめて卒論ができる。この話が下宿で学生の口から口へ伝わっているためか、男女共学の都留大では、地理ゼミへの女性の参加がすくない。ゼミの4年生男性5人・女性3人、3年生男性8人・女性2人という構成の関係では、ゼミの女子学生がはたす役割は、なかなか重要である。ゼミ生にはいつも「女性だけでかたまりになって行動しないこと」ときびしくいつけている。なぜなら、女性が入らないパートは、いつの間にか活気を失っていくからである。

「先生、お茶大生とのゼミの話どうなりました？」

「先生、お茶大生とゼミをやるのはいいですね!」「先生、お茶大生ほんとに卒論中間発表会にくるんですか」お茶大生にセミナーハウスでの計画をもちだす前に、私が都留大の3年ゼミ生にこの予定を話したとき、彼等はハッと驚き、心もちうれしそうな顔をしたものの、けっして声にだして賛意を表明しなかった。しかし、1時間もたないうち、1人ずつつぎつぎ私の研究室にきて、なにくれとないそぶりて、何事かつぶやき、そとでていったのである。

初秋の2日間にわたる討論は、他校からの学生の質問や意見によって、学生各自の思考の幅を大いにひろげ、卒論の完成へむけて意欲をかき立てられたとみることができる。インターゼミは成功した。お茶大地理学科の3年生と2年生! どうもセミナーハウスまできてくださって、ありがとう。

さて、1月の卒論発表会にもお茶大生の参加をと、4年ゼミ生もその心づもりで発表を用意していたところ、準備の手ちがいで、彼女たちと都留大生との再会の夢はきえかかった。しかし、まだお茶大生をスケートに招待したいという、ゼミ生の希望はこのこされている。彼等は「お茶大生熱烈歓迎」で、富士急都留市駅までむかえるのだという。これが実現されるのかどうか、たのしみにもまもりたいところである。

(都留文科大学)

雲南にみる農の文化

江波戸 昭

暮に5年ぶりに、お茶大生を含む地理関係の学生たちを連れて中国の雲南を訪れた。冬としてははじめてだったが、さすが“四季如春”といわれる地だけあって、標高2,000メートル近くあるにもかかわらず、省花のツツジまでがちらほらと咲く暖かさに驚かされた。そして、一面に緑が絨毯を敷きつめたような広々とした耕地。垣子と呼ばれる山間の盆地に開かれた水田や山の斜面の棚田・段畑が美事に裏作の作物に覆われているのである。裏作がほとんど姿を消してしまってもう久しく、うるおのない日本——とくに関東平野の冬の田園風景になれきってしまったわれわれにとって、この行き届いた耕地の管理に、なにか忘れ去ったものを改めて教えられる想いがしたものだ。

うすい緑は小麦でちょうど麦踏み時の背丈、より色が濃く、量的に圧倒的に多いのが開花期に近いソラマメで、しばしば各種の葉菜類が混在している。1~2度は食卓にも登場した小粒のソラマメは、食用というよりむしろ飼料用であり、それに加えていうまでもなく、クローバーやレンゲ、ウマゴヤシなどと同様、マメ科の作物として地力維持の効果をもつものである。

有名な桂林のある広西省西部から貴州・雲南へとつづくカルスト地帯として、このあたり赤土の荒れ山もかなり目立つが、それが通訳氏の説明どおりの文革期の濫伐によるものだけなのかどうかは別として、里山に多く見られる松林の一角は、これまた非常によく管理されているように見受けられた。本来はこのあたり、

われらが父祖の地として指摘されている“照葉樹林帯”の一角なのだが、山道の奥深くや峠越えの折にその片鱗が偲ばれる程度で、西南日本と同じくそのほとんどは二次林化してしまっている。その村里近くの部分が多く松の疎林となっていて、近年、日本へ輸出されるマツタケの産地として脚光をあびている。しかし、その管理のよさは、マツタケ取人を目指しての打算的な努力というよりは、従来からの燃料用の山林としての用途に対してのものようだ。初冬という時期にあたっていたためだろうが、落葉した松葉をかき集めて大きく束ね、天秤棒で背負って山から降りてくる農民の姿、そして民家の傍らにそれが山と積まれている情景にしばしば接したものだ。

ちなみに、マツタケの現地値段は、干しあげた極上物で100グラム当り30円（日本円で1,300円ほど）であった。生で約1斤（500グラム）にあたる量である。

ともかく、このような耕地や山林の生産力維持ないし増進に対する農民の姿勢が、最近の生産請負制によって助長されているのであれば、それも大いに結構なことなのだが、それ以上に、長い歴史のなかで積みあ

げられてきた、典型的な農耕民族としての中国の民衆——漢民族ばかりでなく当地に多い少数民族を含めて——の土地に対する愛情、それから生み出されて農の文化の強靱さをみせつけられる感であった。

それにしても5年ぶりに訪れた昆明東部の撒尼族の地、カルスト地形観光地として知られた石林のあまりの変貌ぶりには目を覆うものがあった。執拗につきまとうみやげ売りのおばさんや娘さんのカタコトの日本語からして、それがもっぱら、狂乱地価に弄ばれ、農の文化を忘れ去ってしまったわが同胞のなせる業ということは想像に難くないのだが、まさにこれでは“観光公害”である。経済大國日本の公害輸出の一形態というべきもので、これがひいては地元の階層分化・地域分化を助長させ、さらに経済・文化の破綻に結びつくこと必定と思われる。中国側の開放政策にしても、末端管理が不十分であることを痛感して帰国したのだったが、はからずもその直後、“自由化の行き過ぎ”に対する引き締めの政策が、またまた中国を大きく揺るがすことになったのである。

（明治大学）

国際化時代の病気

太田 勇

国際化の必要が強調され出したのはいつ頃だったろう。近年それを聞く頻度が高くなった。日本企業の海外進出はますます盛んになり、円高に助けられて海外旅行者は増え続ける。国外へ出る日本人の数は1年に500万に達したという。かつては夢物語だった外国での生活がいまは身近になった。小学生でさえ親もとを離れて留学する時代だ。海外へ出ること、外国人と接することは、もはや限られた人々の特権でもなければ、異例の体験でもない。すべての日本人が国際的になったかに見える。

ところが不思議なことに、「国際都市」東京においてすら、外国人はいぜんガイジンの扱いを受けている。電車のなか、街角はいうに及ばず、往々にして外国人旅行者の多い大ホテルでも、ガイジンすなわち白人は、いつもじろじろ眺められる存在だ。白人はみな英語をしゃべると信じる子供たちは、ガイジンを見るとハローと呼びかける。

日本社会では外国へ行った経験は相変わらず自慢の

種となり、長く日本を離れていればいるだけ偉くなる。驚いたのは、海外の出張・勤務が当たり前の会社、職業でもそれがあることだ。長い外国生活で日本の情報にうとくなり、日本語が下手になったと得意気に語る人さえいる。外国住いそのものが自慢になるのは、もちろん、それを羨み感心する人口が大きいからだ。外国で何をしていたかは大して重要ではない。大切なのはどこの国に、どのくらい長くいたかだ。韓国よりはオーストラリアがよく、オーストラリアよりはフランスが優る。カナダの2年はスイスの2年と同じかもしれないが、台湾の10年はアメリカの3年に及ばない。これを偏見・差別と言わずに何と言おう。

『週刊文春』1月22日号にこんな記事があった。山形県朝日町の農家の「嫁さがし」についての関係者の談話：うちも本当はアメリカとかフランスとか先進国から嫁をもらいたいんですけど、そこまでいくにはうちの町の男性ももっと勉強しなきゃならないし……日本へ行ってもいいというのは今のところフィリピン以外